

地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



清水沢東住宅の集会所は本やソファ、コーヒーメーカーなどがあり、はじめての人も、子どもも訪れやすい空間だ（宮城県塩釜市／詳しくは5頁へ）

特集

多世代をつなぐ自治活動

情報誌をツールに、地域みんなの力を結集する 2

八木山東町内会（宮城県仙台市太白区）

子ども・子育て世代と育む住宅の自治活動 5

清水沢東会（宮城県塩釜市）

専門家に聞く地域づくりのヒント 7

金城学院大学 人間科学部 准教授 柴田 学さん

まじわる災害公営住宅 48 8

あゆみのくらぶ（宮城県石巻市）

場の力 49 9

お茶飲み女子会（宮城県山元町）

つくる・稼ぐ・元気になる 53 10

上川名地区活性化推進組合（宮城県柴田町）

東北の元気 60 11

貝ヶ森美術サークル（仙台市青葉区）

どこでもサロン 67 12

ほほえみ班（福岡県福島市）

住民が支え合う生活支援 10 13

沖代どんぐりサービス（大分県中津市）

被災経験地からのレポート 14

特定非営利活動法人 えひめ 311（愛媛県松山市）

支援員インタビュー 6 15

芦 雄子さん（宮城県亶理町）

宮城県サポートセンター支援事務所の活動日記 6 16

・次号予告

多世代をつなぐ自治活動

同じところに住む人びとが交流し、災害に備えたり、ごみ集積場や公園などの環境をきれいにしたり。自分たちの地域を住みよくするため、自治活動が行われています。

しかし、若い世代の理解や協力が得にくい、後継者が不足している、という声も最近よく聞かれます。今回は、子ども、若者、子育て世代も巻き込んで、多世代で意欲的に活動する町内会、管理組合を紹介します。若い世代と一緒に取り組むヒントも教えてくれました——世代を超えて思いはつながっています。

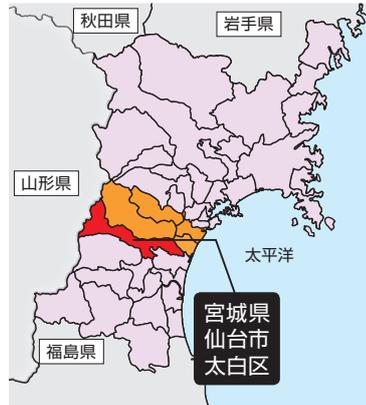


「そこまでやるか、町内会」(A 4判中綴じ 22 ページ)



情報誌をツールに、地域みんなの力を結集する

八木山東町内会 (仙台市太白区)



仙台市太白区の八木山東地区の人口は約600人、高齢化率は約35.8%(2018年7月時点)。八木山東町内会では、高齢化が進む中で、住民のニーズを捉えたツールや多世代を巻き込む取り組みを独自に生み出している。

外出先での事故に備え、自分の名前や家族の連絡先、係りつけの病院等を記入、携帯する名刺サイズの「救急時連絡カード」の作

成。持ち帰り自由の時刻表付きチラシのバス停備え付け。ゴミ集積場のカラス・ネコ避け「ハンサムネット」の設置。そして、19年には町内会のこれまでの活動をまとめ、防災対策や通学路危険箇所マップ、地区のサークル一覧などを網羅した暮らしに役立つ情報誌を発行した——その名も、「そこまでやるか、町内会」。

これからの地域では、各世代・分野を分断するのではなく、皆で支え合う「総力戦」が大事だと考えた。情報誌はそのためのツールだ。

世代を超えた協力関係をいかにつくるか。町内会長の五十嵐講一さんと、前会長で民生委員児童委員の井上則雄さんに話を聞いた。

リーダーレスでも 動ける体制を

東日本大震災時に組織的に動けなかった反省から、防災体制を定めた「防災対策マニュアル」と、避難所等を落とし込んだ「防災マップ」を八木山東町内会で13年に作成した。また、町内会で防災器具をそろえ、防災訓練を主催して、有事に備えている。このマニュアルとマップを整備し、地域の情報と一緒にまとめたのが「そこまでやるか、町内会」だ。子ども会や地域包括支援センター、老人クラブ、市民センター、みやぎ生協など地域団体の協力も得て、紹介頁を設けた。赤い羽根共同募金の助成金を受けて町内会が編纂し、全世帯に配布した。

情報誌は地域の「総力戦」のツールに用いる。通学危険区域マップを全世帯で共有するのも、地

域で子どもを見守っていただくためだ。有事に会長が不在でも、防災対策を町内会で共有できていれば、連携をとれる。「リーダーレスでも動ける体制をつくらなきゃいけない」（井上さん）。

支えられる力も必要

総力戦として、町内会は子ども・若者と一緒に行う活動にも注力する。

年一回、子ども会・近隣の町内会と共催する「八木山東夏祭り」は、子どものゲーム企画を取り入れているのが特長。地元の中学生らによるよさこいも披露され、最後は「子どもたち一人ひとりが手持ちの花火を楽しみ、非常に盛り上がりつつ終わる」（五十嵐さん）。草で荒れていた地区の公園を、町内会員と学校をとおして募った中学生で除草、清掃をした。「仙台市百年の杜植栽助成金」

でアジサイとナツメを植え、きれいで色彩豊かな公園に生まれ変わった。植栽には地区在住の大学の先生を通じて、大学生の協力も得た。「若い人の力はすごい。俺たちがヘトヘトになっている作業を軽々できる」（井上さん）。作業後は、皆で芋煮会を行い、労った。

こうして、若い世代を巻き込むために大切なこととは、「そのためにはリーダーが率先して実行しなければならぬ。結局は信頼関係をどう築けるかですね」（井上さん）。そして、若い世代に限らず、「発信力」、「支えられる力、支えたいと思わせる力（受援力）」も大事だという。懸命な取り組みが見えれば、周囲の応援を得やすい。

町内会の人材発掘には、 会話の機会をどうもつか

次世代の町内会の人材発

掘も見据える。

情報誌を啓発に活用し、会員を増やしたいと考えている。町内の輪番制で担う班長には、30〜40歳代の人も多い。そこを入り口にした。「人材発掘には、会話を多くかわすことが大事。班長と要援護者を回る時や役員会の時に、人柄をつかんで、町内会のために力を貸してくれそうな人をお願いしています」（五十嵐さん）。実際、班長交代後も、協力してくれる人がいる。「味方をつくっていきたい。そのために、班長活動はたいへんだっただけだよっておもしろかった、と一つでも感じてもらえれば」（同）。

留まるためには 絶えず走り続ける

今後の展開について、井上さんは「運動論」の大事さを説く。「世のなか



左から町内会長の五十嵐構一さん、前町内会長の井上則雄さん

は動いていて、ニーズは変わる。やってきたことをリファイン(精錬)して、世のなかの動きにあわせて進化しなきゃいけない」。情報誌もつくって終わりにしない。班長への説明時に使うなど、町内で共通認識をつくるために活用している。内容の検証や定着、情報の更新にも努める。「見ていてくれるだろうという前提ではまずい。根づかせるために、対面でのお話も必要だと思えます」(五十嵐さん)。新しく移住した人の

もとに、会長と班長が情報誌と緊急安心カードを持参して訪問している。公園の植栽も、あじさいの景観を味わう散歩コースづくり、薬膳に用いられるナツメの実の収穫祭で健康増進につなげる「運動論」を見据えたものだ。魅力維持のための定期的な草刈りも絶やさない。次なる「運動論」も準備する。高齢者は使わないうものを多くもっている。それを集めて、バザーを開催し、地区に住んでもらえる一人暮らしの大学生に提供する仕組みを考えている。

地区の課題は多世代が憩うには十分な「場」がないことだが、そのため「そこまでやるか、町内会」の配布後、住民からは「いろいろな情報が入っているね」「本当にいいものだよね」「町内会ってそんなことをやっていったんだ」と反響があったという。町内会を身近に感じ、地域づくりのアイデア、可能性にワクワクした若い世代もいるのではないかと。目に見える形にして分かち合うこと、そこから次なる運動に展開し続けることで、思いと力は広がり、多世代の支え合いがより育っていくだろう。

田



防災訓練と夏祭りの様子。夏祭りは屋台や盆踊りのほか、子どものゲーム企画が特長



「そこまでやるか〜」にも掲載した緊急時連絡カードとハンサムネットの説明

の資金づくりの活動も模索している。

ポイント /

- 防災対策をベースに、町内会の歴史・組織・取り組み、地域の活動団体の情報を集約した冊子を作成・配布した。世代・分野を横断して、みんなで支え合う「総力戦」が必要で、そのために活用する。
- 一回きりの活動で終わらせない。地域力維持のための活動を行ったり、情報を見直して更新したり、ほかの活動と連動させたりして、世のなか、ニーズの変化にあわせて動くことが大事。

DATA 八木山東町内会：1972年設立。現役員は32人（うち、班長は12人）



クリスマス会でふるまわれたシチューとパン、ケーキのランチに多世代が笑顔に

子ども・子育て世代と育む住宅の自治活動

清水沢東会（宮城県塩釜市）



170戸からなる塩釜市の災害公営住宅「市営清水沢東住宅」は、郊外の高台の住宅街にある。住宅の管理組合「清水沢東会」では30〜40歳代の若手役員が活躍しており、主催する行事には子ども、子育て世代の参加も多い。昨年12月には、クリスマス会を主催。クリスマス飾りで彩られた集会所は多世代でにぎわった。シチューとパン、ケーキのランチを味わい、クリスマスリースづくりでは、リボンやデコレーションボールなどを思いおもいに飾りつけた。豪華景品の当たるビンゴ大会もあり、一際多くの人で盛りあがった。

加した秋保智香さんは、こうした催しに「助かります。話し相手もできるし、和む。住みやすくなりますよね」と感謝する。入居して約1年の阿部豊美さんも、「普段会わない人とも顔をあわせられ、お知り合いが広がった。交流する場ってたいせつだと思います」とこうした集まりの意義を語った。

「管理組合」をつくったわけ

同住宅は、3号棟が2016年6月、1・2号棟は同年9月から入居開始。先工区で、やや離れた3号棟は独自に自治会を結成し、清水沢東会は1・2号棟の住民で組織されることになる。

塩釜市やUR都市機構（後）つながりデザインセンター・あすと長町に引き継ぐ）などの他団体の

サポートも受けながら、住民は入居前から少しずつつながりを育んできた。集会所の活用法を話し合う意見交換会を経て、住民のサークルも生まれて交流は活発化していく。

市の働きかけで、文書配布や共益費の徴収などを行う「監理補助員」（現・管理連絡員）を棟ごとに選出することになった。実質的な入居者代表である。選出のための入居者会合で選ばれたのが、現・清水沢東会の会長・副会長でもある、坂口節子さんと福田由佳さんだ。

全戸の意向調査をする
と、「自治会ができても」
入会したくない」という
声は4割あった（「入会
したい」も同数）。そうし
た人の多くも、見守り活
動などの参加は希望して
いた。そこで、共用部の
維持管理を行う「管理組
合」とし、1・2号棟の全
世帯加盟で清水沢東会が
18年4月に生まれた。

「共益費のみで自治会費は集めていない。そうしたことは説明会で話し、

皆さんに理解いただいた」（坂口さん）
会の主な役割は、集会所の管理や清掃活動の実施、回覧板の配布、年中行事の主催だ。

住宅管理の工夫

行事は実行委員会方式で、その都度協力者を募る。一時的でいい分、協力もしやすい。そこには、「みんなで活動する自治会にしたい」（坂口さん）、「負担に思うやり方はしたくない。できる形で参加してもらえるように」（福田



サンタに扮した役員と親子連れの参加者で

さん）という意図がある。集会所の使用には、料金を敷いて、自治管理組合の費用を抑制。団体はチェック表を記入して、使用後に掃除や消灯、戸締りを確認する。

清掃活動は全世帯で月一回行い、不参加の場合は清掃協力金と不参加申請書を集める。

今後について、坂口さんは、「私が永遠にできるわけではない。役員をやって流れを覚えてもらえれば、ある程度形をつくれれば、やりやすいと思う」と語る。

役員も、「坂口さんはやることをやって、だめなこととはだめって言える、周りが認める人。そういう人が増えてくれれば。そうした姿を見せてくれるから、自分たちもどうするか、を察することができると、多くを感じている。

子どもがつながる

役員や実行委員には若い世代も多いが、巻き込むためにたいせつなこととは、若手役員の熊谷さんは、

「子どものいる地域って、コミュニケーションがとりやすい。『若い人が参加しない』と責めずに、理解してあげて、入り込みすぎない程度に子育て世代を応援できる地域じゃない」と話す。



オリジナルのリースは記念に

たものだった。リースづくりは、子どもがより楽しめるようにと一昨年の会のケーキづくりから変えて企画したもので、子どもたちは夢中になって取り組み、完成させたリースに誇らしげな笑顔を浮かべていた。

子どもたちにとって、こうして大人たちの思いにもふれながら、自治活動に参加した経験は、きつとすてきな思い出になり、大人になって自分の住む地域に積極的に携わっていく原動力になるのではないだろうか。

田

ポイント

- 年中行事は実行委員会方式で協力者を募る。負担にならない形で協力しやすい。
- 集会所の利用団体にチェックシートを記入、提出してもらうことで、管理をやすく。
- 子どもが会話のきっかけになったり、子どもに準備を手伝ってもらったり、子どもの力を活かした自治活動を。

専門家に聞く地域づくりのヒント

町内会・管理組合を サードプレイスに

今回の特集テーマは、多世代をつなぐ自治活動です。本来、町内会などの住民自治組織とは、地域内のさまざまな諸事項にかかわるため、地域で暮らすすべての世代が幅広くかかわるべき性質の組織です。しかしながら、人口減少社会や少子高齢化、とも働き家族の増加が背景にあり、価値観も多様化していくなかで、自治活動も多世代がかかわり合うための工夫が求められるようになっています。そのための示唆を得ると言う意味でも、八木山町内会・清水沢東会の事例からは、三つの共通した要素が導き出せると思います。

一つ目は、「リーダーが代わっても維持できる体制づくり」です。特定のリーダー層に任せるのではなく、リーダーレス（八木山町内会）、行事の実行委員会方式（清水沢東会）といったように、誰であっても担うことができる仕組みをつくらなければ、組織を維持することはできません。

二つ目に「子ども・若者の役割・出番をつくること」です。両事例ともに、子ども・若者が、ゆるやかに地域活動へ参加できるようなルートづくり、工夫がなされて

金城学院大学 人間科学部コミュニティ福祉学科 准教授

柴田 学

(しばた・まなぶ)さん



関西学院大学人間福祉学部実習助手、川崎医療福祉大学医療福祉学部助教、金城学院大学人間科学部専任講師を経て現職。専門は社会起業、コミュニティワーク論、社会福祉学。主な著書として『これからの社会的企業に求められるものは何か』（編著 ミネルヴァ書房 2015年）、『社会福祉法人制度改革の展望と課題』（共著 大阪公立大学共同出版会 2019年）など。

います。また、若い人を責めない（清水沢東会）など、大人が上から目線ではなく、子ども・若者への共感の眼差しをもつことで、地域活動への敷居も低くなると考えます。

そして、三つ目は「地域資源から何ができるかの模索」です。情報誌や防災マップの作成（八木山町内会）、子どもが担い手となるプログラムづくり（清水沢東会）は、人材も含めた地域資源を生かして、そこから何ができるかを模索した結果だと言えます。地域が有している地域資源を見つめ直し、その資源の長所、可能性を引き出すという視点が重要です。

昨今、町内会などの住民自治組織の加入率が減少傾向にあったり、担い手の確保で苦しみ、活動そのものが衰退している話をよく耳にします。しかし、町内会などの住民自治組織がどんな世代でもかかわりやすいものとなり、住民にとっての自己実現の場として機能すれば、自宅でも職場でもない、地域にとって必要な第3の居場所（サードプレイス）として醸成されていくのではないのでしょうか。



まじわる！

集団移転＆災害公営住宅

第48回

笑顔の絶えない会が、入居者同士の交流を保ち続ける

あゆみのくらぶ（宮城県石巻市）



14団地もの災害公営住宅（復興住宅）が整備された、宮城県石巻市蛇田地区。2015年に入居開始となった新西前沼第一復興住宅には、3棟で約200世帯が暮らす。年間を通じて、団地会の行事など住民活動が行われていて、集会所では毎月「あゆみのくらぶ」という有志の会が開かれる。同住宅入居者や周辺のあゆみ野地区の住民が数人集まり、レクリエーションをとおして親睦を深めている。

会の前半は、椅子に座ったまま手足の曲げ伸ばしをしたり、立ちあがってゆるやかに全身を動かしたりして身体をほぐす。後半には歌詞カードを見ながら歌を歌ったり、お手玉を使ったりお座敷遊び、手遊びなどをして、頭の体操にもなっている。それらの進行役は、講師として招いている、日本レクリエーション協会の活動スタッフが務める。

体調を崩してしばらく欠席していた人が集会所前を通ると、代表の菅藤さつ子さんが声をかけ、無理のないように見学を促した。少し経つと、ほかのメンバーが「一緒にやろうよ」とレクリエーションに誘い込む。久しぶりの参加でも、明るくにぎやかな交流を満喫。あそこから輪にまざったメンバーは「体調がよくなったからここにでてこなきゃいけないな」と思っていた。お茶飲みも楽しいの」と話す。

それぞれの近況を話したり、笑いが絶えないメンバーたち。「好きなことを言い合えるって楽しい」「みんながコミュニケーションをとるのが楽しい」「ここに来ると元気になるの」と、会が笑顔であふれる理由を語る。

この活動の始まりは、集会所で支援機関が定期的の実施していたレクリエーションの会がきっかけだった。その実施期間が終了するとき、会場の鍵の管理をしていた菅藤さんが、「もっと続けたい」という参加者の声を拾い、自ら中心となって、同じ講師に引き続き協力を依頼。住民活動として再スタートし、2年間が経つ。

取材をした日の最後には、お茶飲みをしながら今後の活動について皆で話し合った。無料で使用できていた集会所が有料になるかもしれないという現状や、



楽しく冗談を言い合い、笑いが絶えない



気心知れたメンバー同士で集うことが元気の秘訣

清

震災で離ればなれになったご近所さんが、コンテナハウスで、お茶飲み話に花を咲かせる。昔なじみの間柄、なつかしい話題で盛りあがる。「あれ」「それ」でも通じる関係が素敵だ。予定時間より早く訪れる人もいるほど、会を心待ちにしている。立ち寄ったケーキ屋さんや銀行員さんもお茶飲みにまぎっていくこともあるという。楽しく、温かな空間がそこにある。

なじみの
お茶飲み仲間が集う



コンテナハウスでのお茶飲み女子会。室内には台所やトイレもあって快適に過ごせる。右から3人目が三島良子さん



お茶飲み仲間
でフラダンスを行ったことも



僧侶がコンテナハウスで開いた
流しそうめんの思い出



提供を受けた、4台連結型のコンテナハウス



ものづくりも行う。作品は室内に

山元町花釜地区の三島良子さんは、自宅敷地内のコンテナハウスで、お茶つこ会を毎週開く。参加者は、かつて地区内で隣近所だった約20人。東日本大震災の津波被害を受け、他地区の災害公営住宅に入居した人と現地で再建した人が通う。

得意料理を持ち寄って、お茶飲みの話題は尽きない。準備や片づけもみんなで行う。参加者は、「ここに来るのが楽しみ。毎週でも飽きない」「みんなでお話するのが楽しい」と口々に話す。

コンテナハウスは、高野山真言宗の僧侶が三島さんの敷地を借りて、震災支援の拠点として設けたものだ。2012年に、住民同士で集まれる機会をつくろうと、ここでお茶飲みを始めた三島さん。自身は当時プレハブ仮設住宅から通っており、ボランティアから支援を受けた感謝、お返しをしたい思いも背景にあったという。

参加者の最高齢は90歳。これまで風邪などで休んだ人はいない。この会が健康維持の秘訣かもしれない。三島さん自身も、継続のために、毎朝散歩して体力をつけているという。「みんなが楽しくしているのが、私もうれしい。来てもらうことに感謝して、続けていきたい。」



上川名地区活性化推進組合
<http://kamikawana.jp/kumiai/>



川名農業構造改善センターに開設された農村レストラン



組合員に見守られながら、竹の伐採に挑戦する中学生

地域資源を活かしたイベントや農村レストランで、地域を元気に

上川名地区活性化推進組合（宮城県柴田町）

柴田町の北東部に位置し、水田や里山など豊かな自然に囲まれた上川名地区。

同地区の里山で1月16日（水）、町立船迫中学校の自然体験学習があり、中学生が竹の伐採と加工を体験し、粉碎機で竹をチップにする様子を見学した。学生は「竹を伐採する時の音がよかった。来られてよかった」「意外と難しかったけれど、できうれしかった」と話した。

講師を務めたのは、地区住民による「上川名地区活性化推進組合」の組合員だ。組合は、こうした自然体験学習の受け入れのほか、農村レストランや産地直売所の運営、里山ハイキングコースの整備、「ホタル鑑賞会」「竹林の音楽祭」といった交流イベントの開催、都市部（仙台市内の町内会）との交流などを行っている。

多職種集団の強みを活かして

組合員は、70歳代の男性中心の26人。目的は、地域の自然・歴史・食の再生保全に取り組み、地域資源を活用して地域活性化を図る

こと。

2012年2月に上川名農業構造改善センターにオープンした「農村レストラン縄文の幸」は、完全予約制で、つくたてのお餅などの郷土料理を提供する。設置したノートには、多数の感想が寄せられていた。「地元のが寄せられていた。心の中もつたおもてなし、本当にありがとうございます」「上川名地区の方々のがんばりに感激しました」

料理や配膳は、地区の「お母さん」5人で行っている。組合長の平間栄雄さんは、活動に携わる意義をこう語っている。そこで、ちょっとしたお金が稼げると、楽しいし、孫にあげることが出来る。私たちが生きがいになる。それが健康寿命を長くすることにもなる」。

拠点の農業構造改善センターは、農業予算で建てた。「集会所」ではないので、レストラン営業もしやすい。備品は、宮城県観光連盟の助成金でそろえた。こうしたアイデアは、役場の農政課の職員が組合員にいたことも

大きいという。

組合員は、造園業や農家、元大手企業社員、元役場職員、土木関係者など多様な経歴の人からなる。「さまざまな職種の人が集まってやるのが大事で、協力し合えばいろいろなことができる」（平間さん）。

アイデアと団結の源は飲みニケーション

組合は、10年7月に発足した。きっかけは、07年に上川名地区資源保全隊を組織したこと。この活動が、地区を考える契機になった。全戸に「将来農業をどうしたいか」「集落で困っていること」などのアンケートを実施。役員会を定期的に開催し、そのあとで飲み会も頻繁に行った。「飲みながら、『こういうのがあったらいいんじゃないか』と盛りあがり、組合をつくることになった。大体、いろいろなことは飲み会の産物ですから」（同）。

冒頭の体験学習の終了後も、飲み会があり、地区への思いと新たな夢を語り合った。**田**

貝ヶ森美術サークル

月2回木曜日

午後1時00分～午後4時00分

80回目

市民リレー

東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

絵画を通じて地域の人がつながる

◎貝ヶ森美術サークル(仙台市青葉区)



会員の絵のどこをどう修正すべきか。実例をまじえて解説する久保田先生



会員内でのふれあひも大事に活動している



色彩豊かで、かわいらしいうさぎの絵を披露する98歳の会員

仙台市青葉区の貝ヶ森市民センターで、美術サークルが活動している。水彩の風景画を中心に作品制作を行っており、芸術協会絵画部運営委員の久保田敏先生から指導も受けられる。「絵をとおして、目標、生きがいをもってもらえたらうれしい」と久保田先生はねらいを語る。

開催日の1月22日。会員は自分で選んだ写真をモチーフに水彩画を描いていく。会員同士でコメントし合うこともある。やがて、先生が一つひとつの作品を講評する。

「水中の鯉をどう見せるか。必ず波が出て、姿がゆがんでいくはず」「明暗の調子をよく見る。風景の場合、太陽という光源からしか光は来ない」「常に用心深く薄く塗るのが透明水彩画のコツ」

的確で、ユーモアもまじえた指摘に周囲はうなずき、時折笑いもこぼれる。

会員の一人は、「作品展で知った先生の絵に憧れて、サークルに入った。一人ひとりにあった指導をしてくださるので勉強になる。いろいろなことを教わって楽しい。スキップして帰りたい気持ち」と目を輝かせて語る。

美術サークルは2017年、貝ヶ森市民センター主催講座「貝ヶ森でたのしい水彩スケッチ」(全4回)の受講生が、講座終了後も絵を楽しみたいと結成し、住民主体で運営する。なお、地域の生涯学習活動を企画する国見社会学級の運営に携わる松崎由美子さんも市民センターを通じて、「熱意をもって集まりたいという皆さんの力に」と会員に加わり、絵を描きながら事務作業を担っている。

当初から入れ替わりながら、現会員は7人だ。年齢は50～90歳代で、最高齢は98歳。「若い人が教えるより、自分くらいの年齢が合うのでは」と語る久保田先生自身も、「楽しんでいり、来てもらってありがたい」と会員から力をもらっているという。

老化防止に通い始めた80歳代の会員は、絵を描くことが大好きになり、生活の一部となっていて、家族を介護する合間、早朝に絵を描き自分の時間を過ごすことで、心のバランスがとれているそうだ。「絵を描くこと、サークルに来て友だちと笑うことが、生きがいの一つ」と充実した表情を見せる。

美術サークルは毎月2回木曜日の開催。ここではじめて透明水彩画を覚えた人も多い。夢中になれる世界があり、楽しみを共有できる仲間がいて、鮮やかな時間が塗り重ねられている。



どろいでもサロン

第27回

自然なつながりと支え合いを生み出す



つながり重視の健康づくり

ほほえみ班（福島市飯坂町）



生活協同組合と言えば購買生協をイメージする人が多いと思うが、医療・介護サービスを提供する医療福祉生協もある。組合員が班を組む制度はどちらにもあり、購買生協では共同購入を、医療福祉生協では健康増進や食生活改善、介護予防などの活動を行う。

福島市飯坂町の平野北原地区に暮らす女性たちが25年ほど前結成した「ほほえみ班」は、

福島医療生協の班。班員は現在70～90歳代の11人で、毎月第1土曜、班会を開く。生協本部の支援も受けつつ健康や病気の勉強会、血圧測定などの体調チェック、軽体操、脳トレなどに取り組む。班員がつくった小物や野菜、タンスの肥やしとなった衣類、物置で眠る家庭用品などを提供し合っバザーを開き、売り上げを活動費にあてている。

昨年12月7日、地区の介護サービス利用相談窓口「飯坂南地域包括支援センター」の職員3人とともに班会にお邪魔してみた。

朝9時半、班長の菅野トシ子さん（75歳）宅に班員が集まる。この日は9人が参加。バザーに続いて介護予防の軽体操と口腔ケアの嚥

下体操が行われ、11時頃からおしゃべりタイム。テーブルには持ち寄った菓子、漬け物、手料理がずらり。

「食べておしゃべりするのが一番楽しい」と班員たち。世間話や思い出話のほか、健康、料理、防犯などの情報を交換したり、暮らしに役立つ知恵や工夫を教え合ったり。午後1時を過ぎる頃、三々五々帰宅の途につく。

菅野さんは「仲間と過ごす楽しい時間こそ健康にいい」と話す。高齢で歩行が不自由になり

移動手段もない人は、菅野さんから車を持つ班員が送迎を引き受ける。月1回の班会に限らず、お茶飲みやおすそ分けなど仲間同士の行き来はひんぱん。一緒に買いものをしたり、通院を手伝うこともしょっちゅうという。

要支援1、2などの要介護認定を受けている人も複数いるが、介護サービスの利用はシルバーカーなどの歩行補助具の貸与や自宅への手すり設置にとどまる。同センター所長の齋藤理恵さんは「班への参加や日頃のお付き合いの維持が大事。少しでも外出に結びつく生活支援を心掛けていきます」と説明。デイサービスなどの利用で近所付き合いが減った



福島県

福島市
飯坂町



りしないよう、本人の暮らしぶりを慎重に考慮すること。

ほほえみ班の活動と同センターの姿勢は、つながりを切らない地域づくりのお手本だ。

木

地域の人間関係を育む生活支援

「沖代どんぐりサービス」は、大分県中津市の沖代小学校区をエリアに、住民同士で助け合う訪問型の活動として、介護保険前の1995年に住民有志が立ちあげた。高齢者やその家族、障害のある人、一人親家庭など、沖代校区の住民であれば、会員登録でも利用でき、食事の支度、買い物、洗濯、掃除、話し相手、外出時のつき添いなどのサービスを受けられる。年会費1000円、利用料は1時間700円。担い手も地域の住民だ。

関係性を楽しむ

沖代校区に夫と2人で暮らす白石博子さん（73歳）は、心臓病や転倒などで入退院を繰り返

し、家事をこなすことが難しくなったため、地域包括支援センターから「どんぐりサービス」の紹介を受け、2年前から利用している。当初は週2回利用していたが、いまは週1回・2時間、調理や買い物、掃除などを依頼。買い物の際は、どんぐりスタッフの車に同乗し、スーパーにつき添ってもらうことで品物を選ぶ楽しみがあり、重い荷物も持つてもらえる。調理や掃除が終わったあとは、スタッフとお茶を囲んで、しばし談笑。白石さんは、「とても助かります。何気ないおしゃべりが楽しい」と微笑む。

いるように取り組んでいる。ご自宅にあがって活動するので、ある程度の線引きは必要だと思いが、時間に追われたヘルパー時代と違い、いまは花を植えて庭いじりをするなど、友だちの感覚。地域のなかでつながりができてうれしい」と話す。利用する側も担い手側も、関係性を楽しんでいることが伝わってくる。

地域住民と専門職がつながる

同様の住民型有償サービスは、市社会福祉協議会のあと押しにより、市内15地区のうち10地区に波及。山間地にある高齢化率51%の山国地区でも実現しているというから驚く。調理だけではなく食後の服薬の確認や、認知症の一人暮らしの人を支えるなど、担い手の住民は知識と経験を積んでいる。市社協では、ヘルパー連絡協や介護支援専門員協会等の専門職と住民型有償サービスのマネージャーを対象とする合同研修を開き、お互いの活動の特徴を理解しながら、地域住民と専門職の連携を支える。発足から25年を迎える「沖代どんぐりサービス」の信頼と実績が、波及効果を高めている。

小

作業前



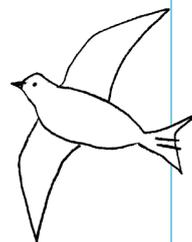
すずめの家では、5時間楽しくしゃべり倒す！

作業後



白石さん宅をテキパキと掃除する井上さん

四国の広域避難者の「命と尊厳」を守りたい



「四国は避難者数が少ないため、常時交流することは難しくても、年数回は顔をあわせる場を設けて、あなたを気にかけているよとメッセージを送っているよ」と話すのは、えひめ311の副代表理事兼事務局長の澤上幸子さんだ。毎年3月11日には、避難者交流会を開き、一人で寂しく過ごすことがないようにと心を配ってきた。

当事者による 当事者のための活動

えひめ311は、東日本大震災により避難を余儀



副代表理事兼事務局長の澤上さん（左）と事務局スタッフの吉田さん

なくされた当事者が中心となり、2012年9月に発足した。愛媛県内の避難者や移住者向けの相談・交流会・里帰り支援、訪問活動、被災地支援、機関誌の発行、防災・減災に向けて自身の体験を語り伝える活動を実施。14年度からは四国4県の避難者支援に目を向けるとともに、各県庁を訪問して避難者の状況を共有するなど、四国を面とらえて官民協働の機運を高めてきた。

復興庁によれば、東日本大震災により四国に避難している人は239人（20年1月14日時点）。福島県を中心に、宮城県からの避難者も含まれる。最近では、「宮城に転勤して数か月で被災し、避難者として四国の県営住宅に入ったが、このまま入居していいのだろうか」という相談や、「この9年一度も宮城に帰っていない。墓参りをし



常設の相談処には、災害や避難者支援に関する資料がたくさん

たい」という相談を受けたという。必要に応じて相談者宅を訪問し、宮城への同行支援も予定している。また、「相談ごとはないけれど、情報がほしい」「つながりを保ちたい」という人たちも、えひめ311とつながっている。

当事者の経験を生かすために

被災地に住む人と、避難した人の心をつなぎ、支えたいという思いから、8月には四国八十八か所の一つ、石手寺を会場に、盆踊り交流会を開催。今年度

は、福島県相馬市から相馬盆唄の踊りの師匠を招き、地元の人たちも一緒に習ってコンテストを行い、大盛況だった。

また、西日本にある避難者支援団体と協働し、避難者先から福島県までの旅費を補助して、福島県内での避難者交流会を実現。避難者が自分の目で福島県の現状を知り、帰還するかどうか、子どもの進学や就労について検討する機会となった。

西日本豪雨時には、愛媛県社会福祉協議会とともに被災者の生活支援に従事。すべての活動は、被災者・避難者の「命と尊厳」を守りたいという思いからだ。

広域避難者の多くは、いまも「避難は故郷を捨てること」という周囲の目に苦しんでいる。命と尊厳を守る「避難」は特別なことではないことを伝え、経験者を分かち合うために、澤上さんは当事者ネットワーク

「ヒラエス」の立ちあげに参画し、全国でキャラバンを行っている。「ゆくゆくは広域避難者に関する政策提言ができれば」と話す澤上さん。各地で災害が相次ぐなか、当事者の経験が生かされるために奔走が続く。小

DATA

特定非営利活動法人えひめ311

〒790-0871 愛媛県松山市東一万町2
第3森ビル1階 協働オフィス内
TEL 089-993-8329
FAX 089-993-8339
開所時間 月～金曜日 10～15時
E-mail info@ehime311.official.jp
URL http://ehime311.official.jp/

311当事者ネットワーク 「ヒラエス」

主催・運営
特定非営利活動法人えひめ311
E-mail info@hiraeth.work
URL http://hiraeth.work/



— 支援員になったきっかけは？

芦 実家などが被災したり、東日本大震災の被害を目の当たりにして、地域のために何かしたいと思い入職しました。

— どのような活動をしてきましたか？

芦 私が加わったのは、仮設住宅から復興住宅への転居期でした。戸別の見守りなどに加え、使い慣れないガス給湯器の使い方を一緒に確認したり、悪質な訪問販売の対策をとることなどもありました。転居の不安で張りつめていた住民の気持ち、支援員の声かけなどを通じて軽くなっていったようで、楽しそうに過ごす人が次第に増えました。

— 苦労したことは？

芦 接客業の経験があったので、採用試験の面接でも「人と接することが得意」と言うほど自信があったのですが、支援業務のなかで人と接することはまた別のものでした。言葉でうまく伝えることができずに住民から叱られたこ

宮城県巨理町では、巨理ささえあいセンター「ほっと」の運営を、巨理町社会福祉協議会が受託している。生活支援相談員を2019年度は4人、20年度は2人配置。集合住宅型と戸建て型、計477戸整備された災害公営住宅を主な対象として、入居者の訪問などを行っている。20年度末の事業終息以降も入居者が孤立せずに暮らせるよう、見守りを通じたつながりづくりを力を入れている。(聞き手…編集部・清野哲史)

巨理ささえあいセンター「ほっと」生活支援相談員

芦雄子さん



ともあって、個々との関係づくりには特に気をつけています。サロンなど地域で交流する住民活動が増えていることが感じられると励みになります。

— 現在の目標は？

芦 住民にとって心残りのないように「ほっと」を終息させることをみなで目指しています。支援員の訪問をいつも心待ちにしてくれている住民もいますが、私たちがいなくても安心して暮らしてもらいたいんです。住民が1人でも多くの人と関係をもてるよう、必要に応じて支援機関やサロンなどにつながるよう努めています。困りごとなどがあっても、そのことを発信するのが苦手な人もいますし、そのような人は周りから気にかけてもらえる存在になればいいと思っています。カーテンの開け閉めや新聞の溜まり具合など、生活の様子を見守られるような環境を整えたいです。

— 住民に対して、どのようなかわりを心がけていますか？

芦 これまでの活動で、復興

住宅や周辺の世話役の住民との関係もできているので、ほかの住民のことを訪ねて教えてもらおうとすると、体調や生活の様子などを自然と気にかけてくれたりします。そのような機会をこれからも増やしていきたいです。

— 今後もたいせつにしていきたいことは何ですか？

芦 欠かせないのは、思いやりの心です。支援員としてかわるなか、言葉で意思疎通を図ることの難しさも感じましたが、思いやりをもって人と接する。そうすれば気持ちは通じるんだということを学びました。



地域に出て住民とコミュニケーションをとる芦さん



被災者支援から学んだ ソーシャルワーク

被災者支援に携わる前は、医療機関の医療ソーシャルワーカーとして、相談センターを訪れる方の相談にのっていました。

その後に携わった被災者支援では、相談センターのような場所で待つのではなく、被災者の方々がいる場所に出席するというスタイルでした。活動開始時、相談センターという看板も場所もなく、身一つでどうやって活動したらよいのだろうと途方に暮れたことを思い出します。そのときの私は、いくらソーシャルワーカーだと言っても「何をしてくれるかわからない人」でしかなかったと思います。

そんなとき、先に被災者支援活動をしていた方が、被災した方が集うサロンへ連れて行ってくださいました。先に活動している存在があったから、そこに入れてもらったのに、それでも、自分は何をしたら役に立てるのだろうと日々悩んでいました。活動を開始したのが発災から2年経過していたこともあって、自分自身の勝手な焦りもあったように思います。

サロンに連れて行ってくださった支援の先輩に「最初から話を聞かせてもらえることなんてない。3回、4回と通わなくてはだめだ」とアドバイスを受けました。その言葉

を信じて、1回、2回と訪問を重ねるのですが、ただサロンにお邪魔しているだけで何の支援もできていない、自分の所属する組織にも何の報告もできないとひたすら焦っていました。そのときの私は、「支援をしなくては、仕事をしなくては」と、いま思えば、支援の押しつけをしようとしていました。

先輩の助言のとおり、サロンへの訪問を重ねるうちに、支援者と受援者という垣根がなくなり、気がついたら自身もサロンの一員になっていました。話を聞かせてもらえるようになり、会話のなかからその人が抱えているであろう課題が見えてきて、日々感じていた焦りが薄れていきました。それだけではなく、そこに参加している被災者の方からの言葉が自分の活動への力になっていきました。

被災者支援から学んだことは、「目の前の人と対話すること。支援は誰のためのものなのか考えること」。そして、当時の私に「落ちつけ！どっしりと構えろ！」と言いたい。私が何度もお邪魔したサロンでは、支援者側が受援者側に教わったり、励まされたりする場面がたくさんありました。出会った者同士、お互いの日々を支え合っていくことが生きていく力になっていくのだと、いま身をもって感じています。(松本桂子)

宮城県内の研修のお知らせ

令和元年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<地域支え合いの伝え方～見つけた資源を伝えよう～>

【大河原会場】 2月27日(木) 総合会館ララ・さくら

講師：池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

橋本 泰典(全国コミュニティライフサポートセンター

出版・開発グループ 地域支え合い推進プロジェクト チーム長)

田村 洋介(全国コミュニティライフサポートセンター

出版・開発グループ 地域支え合い推進プロジェクト 開発主査)

令和元年度 宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

<地域支え合いの共有の仕方

<見つけた資源を知らせよう！お宝発表会の持ち方～>

【石巻会場】 2月25日(火) 石巻商工会議所

講師：大坂 純(東北こども福祉専門学院 副学院長)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

▼研修の詳細は下記URLをご参照下さい。

http://www.clc-japan.com/miyagi_c/2019_youko.pdf

◎開催中止のお知らせ

新型コロナウイルス感染症の影響により、下記研修につきましては開催中止となっております。不明な点がございましたら事務局までお問い合わせください。

中止

<生活支援コーディネーター基礎・実践研修>

【大河原会場】 3月12日(木)～13日(金) 大河原合同庁舎

講師：高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)

中止

<地域支え合いの共有の仕方

<見つけた資源を知らせよう！お宝発表会の持ち方～>

【大河原会場】 3月27日(金) 仙南芸術文化センター(えずこホール)

講師：高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)

池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

☆次号予告 特集「避難者」



あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joho@clc-japan.com